

合理的配慮の提供事例報告書【中学校】

事例の概要

中学3年生、生徒Aは診断はないが、自閉症スペクトラム傾向である。
感情のコントロールや気持ちの表現が苦手で、学校生活でのつまずきや不安感が大きい。
友達とのスムーズなコミュニケーションがうまくできないことから、学校や教室への不安が大きい。欠席はないが、登校しぶりの状態が続く。
中学1年より通級による指導を受けている。
主治医や市内の支援室とも連携し、保護者支援、本人の自己理解を進めた。
養護教諭や生活支援員が登校時の支援をし、保健室や通級指導教室でのクールダウンの時間や居場所を確保するとともに、本人のその時の困り感の把握に努めた。
学習面については、予習ノートづくりの支援、課題の量や範囲、期限などの調整を行った。
主治医や保護者からの情報を全職員で共有し、本人への対応についての共通理解を図った。

1 対象生徒の障害種

自閉症

2 障害の程度

※学校教育法施行令22条の3に該当か非該当か

3 在籍状況

中学校・通級による指導

4 学年

中3

5 対象生徒の実態

A生徒は診断はないが、自閉症スペクトラム傾向である。欠席はないが、登校渋りが激しい。
気持ちの切り替え、感情のコントロール、意思表示が苦手で、興味があることと、無いことへの意欲や集中の差が大きい。知的には問題ないが、周囲の状況を把握すること、抽象的な言葉の理解、課題提出、ノートをとる・・・などが苦手である。また、周りで話されていることが理解しにくく、友達や先生とのコミュニケーションも不十分な面があり、学校や教室へ行きたくない気持ちが大きくなっていった。
感情のコントロールの苦手さでは、些細なことにイライラしたり、こだわりが強かったりするため、次の行動に移れないことがある。
周囲の状況を把握しながら、どう行動すべきかがわからず、自分の考えや気持ちを言葉で伝える事が苦手である。日常生活でも買い物など、コミュニケーションが必要な場面に苦手意識が強い。
しかし、芸術や語学には才能豊かで、学校以外の学習では興味を持って取り組むことができる。

6 対象生徒についての合意形成に至るまでの経緯

(1 誰からの申し出か 2 申し出の内容 3 連携、調整した関係機関 4 合意形成に至った結論)

中学校進学前に主治医との引継ぎを経て入学。1年、3年時には主治医と担任との面談を重ね、本人の思いや保護者の願い、配慮事項等を情報共有した。

- 1 主治医と保護者の申し出を受け、さらに本人とも具体的に相談をしながら進めた。
- 2 学校内での居場所の確保、提出物や課題の調整、対応する先生を配慮した。
- 3 入学前に主治医、保護者、養護教諭とが情報共有し、入学後も主治医と担任、生活支援担当で情報共有を続けた。保護者とは毎日の登校時に養護教諭や生活支援担当が出会い、その時の不安やつまずきの把握に努めた。進路選択を控えて、市内の支援室からもアドバイスを受けた。具体的な手立てを本人とそのつと相談をした。
- 4 校内の週1回の生活指導(支援)委員会で情報共有し、職員への理解を図りながら実施した。

7 基礎的環境整備の視点と概要

基礎⑥ 専門性のある教員、支援員等の人的配置

大きな声や男性教諭が苦手なので、登校支援時には養護教諭、生活支援担当、不登校担当の女性で対応した。女性教諭が付き添いながら、少しずつ男性教諭とのやり取りに慣れるように支援した。
スクールカウンセリングは受けていなかったが、スクールカウンセラーが在校時に保健室で出会うなど、さりげなく本人の様子を観察してもらい、アドバイスを受けた。
進路選択を控えて、市内の支援室と連携を開始した。保護者支援をするとともに本人の自己理解を進め、自己表現への意識を高めた。また、高校への引継ぎを見通しての相談をすすめた。

基礎⑦ 個に応じた指導や学びの場の設定等による特別な指導

登校時の不安や感情の高ぶりが大きいため、すぐに教室へ入ることがむずかしい。保健室や通級指導教室でクールダウンを図り、その日の時間割や具体的な動きを伝え、見通しを持たせた。また、その時の不安な気持ちなどを聞き出し、一緒に手立てを考て不安軽減への支援をした。
登校しやすい時間に通級指導の時間割を設定し、話の聞きとりとクールダウンができるようにした。
通級による指導では不安感の軽減、感情のコントロール、コミュニケーション、提出課題や提出物を中心に実施した。

8 合理的配慮の観点と概要

合理①-1-1 学習上又は生活上の困難を改善・克服するための配慮

提出課題は教科担当と本人が相談し、ワークの問題をマーカーで囲んだり、提出日をメモしておくなど、範囲や量、提出日を調整しながら進めた。また、予習ノートでは教科書のコピーを一部分利用した。
通級教室では、困り事を聞き、具体的な手立てを本人と相談した。課題の確認、ドリルのような課題はタイマーや色ペン、シールを利用してモチベーションを高める、予習ノートは取り組みやすいプリントやイラスト表現の利用で支援した。長期休業はワークのページを書き込んだ計画カレンダーを作り、課題に取り組んだ。
コミュニケーションでは、伝えることをシナリオに書いての練習や、手紙やメモで伝えることから始めた。メモを持っていると安心して口頭で伝えることができるようになった。
感情のコントロールや気持の表現については、イライラなどの内容を「何があったの？」シートを利用して聞き取り、主治医からのアドバイスも参考に対処方法を提案、練習をした。
自分の苦手さの理解とともに、得意や好きなことにも注目させて、どうしていきたいのか、どんな支援が必要なのかを相談しながら自己理解を進めた。

合理①-2-3 心理面・健康面の配慮

周りの人の些細な言動にイライラを覚え、気持ちの切り替えができない。小さな不安やつまずきを常に抱えているが、そのことを伝えるのも苦手なため、わがままに見えてしまう。困り事がわかりにくく対応に苦慮した。登校時の保護者との連絡を密にし、「何があったの？」シートでA生徒からゆっくり話を聞いた。慣れると自分でシートに困り事を記入したり、得意のイラストで表現するようになった。また、主治医や相談室から本人の気持ちを伝えてもらい、どうしたいのかを具体的に本人と相談しやすくなった。
登校時の不安が大きく、別室で過ごした後もぐずぐずした状態になることもある。楽しい事やきれいな物、イラストには気持ちが動くので、カレンダーに好きなキャラクターのシールを貼り、散歩しながら楽しい話題で気持ちを切り替えられるように関わった。
進路については早期から保護者や主治医の考えを共有してすすめた。市内の支援室での相談で自己理解がさらに進み、高校の先生に理解してほしいという思いを持った。高校生活への不安を軽減するために「自己紹介＝Aさんの取説」をまとめた。話して伝えることはまだ苦手だが、色塗りや美しく表現することには自信を持ち、意欲が高まる。手紙やイラストを工夫して、自分の気持ちを伝える方法をA生徒なりに見いだせた。

9 成果と課題

小学校から専門医療機関との連携を通しての自己理解と家族の理解は少しずつ進んでいった。主治医からのアドバイスも理解して実践しようとしていた。学校ではA生徒の得意、好きなことに注目して支援を工夫した。本人も「苦手なことはあるけど、自分の事は嫌いではない」と自尊心が下がっていない状態である。今後のA生徒の自立を目指す支援が課題である。
進路は早期に保護者と思いを共有してすすめた。A生徒の特性を理解してもらいながら支援が得られ、得意な分野の力を伸ばせる高校を選ぶことができた。さらに、高校生活がスムーズにスタートできるように、自分で「自己紹介・取説」を準備するなど、引継ぎをすすめた。
入学前より小学校、保護者や主治医との情報共有や引継ぎをすすめ、在校中にも保護者、医療や支援室との連携を続けた。しかし、A生徒が本当の気持ちをうまく伝えられるようになるまで時間が必要だったこともあり、細かな思いを理解し、手だての組立てに時間がかかった。
学校生活の構造化、ユニバーサルデザインを意識したわかりやすい授業や学校生活作りをさらに進める必要がある。また、教員の理解や関わりにも差があり、個別の指導計画に基づいた支援を見直すことが課題である。